

●二人で味わう古典和歌(75)

さみだれは美豆の御牧の真菰草刈り干すひまもあらじとぞ思ふ

相模

『後拾遺和歌集』「夏」の一首。

「五月雨のころは、美豆の御牧に生い茂る真菰草を刈り取って干すひまもないにちがいない、そう思うことです」

「さみだれ」(陰暦五月の長雨)は梅雨。「美豆の御牧」

は美豆にある皇室の牧場。山城国の歌枕でもあるが、地名「美豆」の音により、ただでさえ五月雨のころの一首にさらにたつぷりと水分を加えているところがおもしろい。

降り続く雨により放牧もできず、真菰草が生い茂っているのだ。筵などに用いられた真菰草は水辺に群生するので、ここにも水が暗示されている。内容といい音感といい、全体が水浸しのように作られた歌である。

宇治前太政大臣(藤原頼通)の邸宅にて行われた歌合(題「五月雨」)の一首。開催場所にちなんで「賀陽院水閣歌合」とも呼ばれ、ここにも水が含まれている。



平安時代の歌学書『袋草紙』によれば、この歌が披講されるやいなや「満座殿中鼓動し、郭外に及」んだ、つまり「その場の全員の驚嘆の声により建物が揺れ動き、どよめきは外にまで及んだ」という。これはすごいなあ。

歌を作った相模もすごいけれど、披講されるやいなやどよめいた人々も、なんと反応の早いこと。現代のわたしたちにそんな敏感な耳があるだろうか。当時の歌びとたちの歌を聴く力にも感心するエピソードである。

この名譽なるとよめきを起こした作者、相模とはいったいどんな人か。出自は明らかでないが、中流貴族の娘と思われる。二度目の結婚相手・大江公資が相模守に任じられて下向したため、「相模」の名で呼ばれるようになる。が、やがて離婚。そののちの藤原定頼との恋もはかなく終わる。そんな人生の屈折と歌への熱意は無縁ではないだろう。

先の歌を詠んだとき、彼女はすでに四十余歳。当時では老年である。しかし歌人・相模は、老年で起こしたどよめきにより、以後三十年近く歌合の舞台で活躍し、和歌史に名を残したのだ。

(小島ゆかり)